審 査 の 結 果 の 要 旨

氏　　名　　嶋﨑　礼

本論文は、西洋建築史学の中心的研究主題のひとつであるフランスのゴシック建築について、それを「トリフォリウムの建設」という観点から詳細に論じたものである。

ゴシック大聖堂にトリフォリウムと呼ばれる層があることは、広く知られている。しかし、床面から 20m～30mほどの高所で身廊に向かって開いている、幅わずか数十 cm ほどしかないアーケード状のトリフォリウム空間に入り込んで本格的な調査を行った研究は、現地フランスにおいてすらほとんど存在しない。わずかに、いくつかの建物単体のモノグラフ研究においては、トリフォリウムの内部に入って調査した研究もあるが、本研究のように 27 件もの調査を行い、フランスのゴシック建築におけるトリフォリウムを全体的に扱った研究は皆無である。その意味において本研究は、日本はおろか世界でも初めての試みとして、ゴシック建築におけるトリフォリウムの全体像を明らかにしようとした研究であり、まさにこの分野の今後の基盤となる研究といえる。

本論は「序論」「第 1 部」「第 2 部」「結論」に加えて、充実した「資料編」が加えられている。以下、各部の内容を概観する。

「序論」は、ゴシック建築に関する先行研究の的確なレビューからはじまり、既往の「様式論」や「形式論」の限界とその問題点の指摘から、本研究がトリフォリウムを技術的で即物的な面から研究することの意義および研究方法が論じられる。またトリフォリウムおよび壁内通路の定義とその略史についてまとめられている。

「第 1 部　トリフォリウムの技術的特徴とその変遷」は、全 4 章からなる。

「第 1 章　トリフォリウムの構成要素と寸法、石積みの特色」は、本研究全体の基盤となるもっとも重要な章のひとつであり、本研究における独自の研究手法およびその成果が最初に示される部分である。既往の研究がトリフォリウムに言及する場合には、そのアーチのプロフィールなど、造形的・形態的な様式的分析をすることがほとんどだったが、本研究では現地での実測や詳細な観

察に基づき、石材の積み方を明らかにすることによって、トリフォリウムが真実どのように構築されており、当時の建築職人たちが、この空間をどのように形づくっていったのか、またそれが技術的にも時代とともにどのように変遷していったのか、詳細に図化することで示された。

「第２章　トリフォリウムと構造の安定性」では、トリフォリウムが中空の壁という構造的に不利な建築要素であることを鑑みて、それが主要な支柱部分とどのような関係を有しているのか、また壁面においてどのような構造的な工夫をしているのかについて検討した章である。さらにトリフォリウムを構成する石材同士が、さまざまな金属のパーツでつなぎ合わされていることも、詳細な観察に基づき明らかにされた。

「第 3 章　施工と実用」は、ゴシック建築が建設されたときに、トリフォリウムが建設用の足場として、あるいは足場を固定するための場所として活用された可能性について詳細に検討された。また、トリフォリウムそのものがどのように建設されたのか、さらに階段と壁内通路の空間的なつながりの検討から通行システムとしてどのように利用され得たのかについても検討がなされた。さらに、以上の検討から主として建設中に役立てられたと考えられるトリフォリウムが、聖堂の完成後にどのように活用されたのかについても、現地での観察や、絵画資料などを用いて検討された。

「第 4 章　見えるもの・見えないものとしてのトリフォリウム」では、彩色の痕跡や彫刻などの細部についての詳細な観察に基づく検討がなされた。中世のゴシック建築については、かつてさまざまな彩色がなされていたことがしばしば指摘されるものの、そのほとんどは失われてしまっている。しかし本研究では、トリフォリウムの現地調査によって、そこに豊かな彩色の痕跡を見出されることが明らかにされた。また彫刻については、主廊側は丁寧に彫刻されているにもかかわらず、裏側の表から見えない側では簡略された彫刻が多く見られることなどが明らかにされ、トリフォリウムが主に主廊からの見え方に配慮されてつくられたものであることが、明らかにされた。

「第２部　事例研究：トリフォリウムから解明する建設過程」は「第５章　ノワイヨンのノートル＝ダム大聖堂」と「第６章　ランのノートル＝ダム大聖堂」の２つの大聖堂建築における、トリフォリウムの詳細な実測調査に基づく事例研究となっている。両大聖堂のトリフォリウムに並ぶすべての小円柱の高さを実測し、さらにトリフォリウムを構成する石材に見出された職人のサインを見出し、それを図面中にプロットすることで、これらの建築の建設過程を明らかにした作業は圧巻である。

同様に、「結論」の後に収録されている「資料編」では、第２部でとりあげられた 2 つの大聖堂での調査のような、すべての小円柱の実測こそされていない

ものの、これら２つの大聖堂を含む全 27 棟のゴシック建築におけるトリフォリウムの現地調査の記録が詳細にまとめられており、この調査だけでも大変な価値を有している。この資料編が今後のゴシック建築研究の発展に寄与する役割はきわめて大きいだろう。

「結論」では、ゴシック建築研究を特に構造的・技術的観点から進める際のトリフォリウムに着目することの重要性、またゴシック建築が極限まで合理的な構造によって成立していると考えられがちだったことに対して、壁の中に空洞を通して通路を設けるトリフォリウムからは、むしろ構造的な余裕が重要だったこと（ゴシック建築の冗長性）が理解され、高さや軽さを追求する構造的な挑戦の一方で、むしろそれとは相反するトリフォリウムのような空間を有している点に、ゴシック建築の本質があることが指摘された。

以上のように、本論はこれまで誰も成し遂げてこなかったトリフォリウムの丁寧な現地調査に基づき、ゴシック建築の建設のプロセスとその構造的な本質に迫った研究として、きわめて重要な成果を挙げたものである。

よって本論文は博士（工学）の学位請求論文として合格と認められる。

以上